

トムラウシ山アラカルト

小西 則幸（新得山岳会 会長）

秀峰、遙かなる山、百名山のひとつ、トムラウシ山は、大きな事故後2年程は入山者がツアーセンターを中心に減少したと実感できたが、ここ数年は元に戻ったなどの印象である。

夏シーズンは、道外登山者が目立ち、早朝4時出発が多数を占め、2時半発で1時間程度はヘッドラップ使用という登山者も毎日見かけるが、平和的な熊も落ち着かないのではと思ってしまう。それでも下山時のヘッドラップ使用よりはリスクが少ないかもしれない。そのような中では、4時に出発した親子が20時下山というケースは、登りに7時間、頂上で1時間体力の回復を待って下りに8時間を要したことであった。別な事例の登山者はヘッドラップを持参せず、登山口近くまで下りてきたが真っ暗となり、登山道にうずくまっていたなど、遭難救助出動一歩手前の事例が毎年繰り返されている。

歩きは速くないが持久力はあるので、日帰り出来たと思ったとの弁が大方だが、登りに7時間をする人は、その人のエネルギーをほぼ使い切つての山頂であり、下りも想像を超える時間を要してしまうのであろう。往復10時間の行程は、山歴が長くても経験したことなく、日帰り登山ギリギリの行程なのかとも思えてならない。

トムラウシ山の登山道は、「泥濘がひどく田んぼのようだ」との悪評だが、新道（迂回ルート）が出来る前は、カムイサンケナイ川の左岸・右岸への7回の渡渉を繰り返して、コマドリ沢を登っていた。このカムイサンケナイ川の渡渉は、通常であれば大岩の間を少量の水が流れ、登山者は岩の上を登山靴を濡らすこと無く渡れるが、大雨が降ると激流化し、下山者がコマドリ沢で足止めになることが時々あった。

登山者が足止めされるたびに高巻きコース新設が話題となっていた。2001年7月に大雨時の下山で、カムイサンケナイ川を4回目の渡渉中に2人が流され、その内の1名が亡くなつことにより、尾根コース新設の検討が始まった。

2002年に現在の迂回ルートが完成したが、「ハイマツは切らない」、「笹以外の植生があれば回避する」ことなど登山道としての好ましいルートではなく、自然を最大限尊重したルート（逃げ回り）作りとなった。

完成後数年は、斜面を横切る登山道ラインでも、山側の雪溶け水は登山道を横切つて谷側に流れていたが、登山者による踏圧で登山道がくぼみ、山側からの水は谷側に流れることが無く登山道を走るようになり、洗堀が急速に進んだ。

下山した登山者が、宿泊先の東大雪荘カウンターで「百名山なのにこんなぬかるみはヒドイ」と怒鳴る人も毎年数人はいるとのことである。雨天時や降雨翌日は入山禁止にすれば、乾燥も進み泥濘状態も少しほは解消されるのだが、悪天候の中でも入山し、水溜りを泥濘化している加害者になっている自分も知つてほしいと思つてしまうところである。

トムラウシ山直下に「南沼野営指定地」がある。2002年に北海道が携帯トイレブースを設置し、以後毎年6月下旬に開設し、9月に閉鎖されている。野営指定地に行くと「臭う」「日本一汚い野営地」と言われ続けている。用を済ますトイレ道の踏み跡も登山道と間違える程の幅で無数に蜘蛛の巣のごとく拡がっている。

岩陰のティッシュも、環境省が2016年7月上旬に綺麗に拾ったのに巡回の度に存在し、昨年は4回拾ったとのこと。今現在はティッシュの存在しない野営地のはずである。

トイレブースが設置された初年度は、トイレブース周辺のハイマツ上に緑色のビニール袋が10数個捨てられており、非常に悲しくなる風景であった。数年後の出来事では、トイレブースのドアが半開きで、ドアの裏には使用済みの携帯トイレが14個置いて有り、未使用の携帯トイレも4個残っていた。これはどなたかが冗談で、未使用の携帯トイレを多数ブース内に寄付した結果だと思ったものである。親切心からだろうけど、マイナスの行為だと強く思う。他人のまとまった緑袋は、かなり重たく感じた覚えが今でもある。

野営指定地には、トイレの建設を！。これがベストだと思っているが、「トムラウシ山には人工物は要らない」。携帯トイレ携行運動を強力に拡大し、「山には人為的な物を置いてこない」、「自分の物は自分で持ち歩き一緒に下山すべきだ」。との考えもあり、今後も議論していくべきだと思っている。

どちらにしても、当面は携帯トイレを携行し、自分の用済み物は自分で持ち帰るという、運動と実践が全ての登山者の責務だと思う。南沼には携帯トイレブースの複数設置も必要と思う。縦走者が大ザックの外側に袋をぶら下げて歩くのが当たり前になるといいと思う。ぶら下げていないと恥ずかしくなるような運動の広がりがほしいものである。軽くて密閉され、ザックに外付け出来るようなケースが発売されればと、いつも思っている。

トムラウシ南沼野営指定地は、十勝岳連峰と大雪山系の合流点でもある。テント泊が必要なので山歴も長く、大自然に抱かれてひと時を過ごす事をこよなく愛する岳人が多く利用していると思う。トムラウシ山がトムラウシ山で有り続けるために、享受する皆んなで守っていきたいものである。